

報恩記

芥川龍之介

青空文庫

あまかわじんない
阿媽港甚内の話

わたしは甚内じんないと云うものです。苗字みょうじは——さあ、世間では
 ずっと前から、阿媽港甚内あまかわじんないと云っているようです。阿媽港甚内、
 ——あなたもこの名は知っていますか？ いや、驚くには及びま
 せん。わたしはあなたの知っている通り、評判の高い盗人ぬすびとです。
 しかし今夜参ったのは、盗みにはいったものではありません。どう
 かそれだけは安心して下さい。

あなたは日本にほんにいる伴天連ばてれんの中でも、道徳の高い人だと聞いて
 います。して見れば盗人と名のついたものと、しばらくでも一し

よにいと云う事は、愉快ではないかも知れません。が、わたしも思ひのほか、盗みばかりしてもいけないのです。いつぞや聚楽じゅらくの御殿ごてんへ召された呂宋助左衛門るそんすけざえもんの手代てだいの一人も、確か甚内と名乗つていました。また利休居士りきゅうこじの珍重ちんちようしていた「赤がしら」と称える水さしも、それを贈つた連歌師れんがしの本名ほんみようは、甚内じんないとか云つたと聞いています。そう云えばつい二三年前、阿媽港あまかわ日記と云う本を書いた、大村おおむらあたりの通辞つうじの名前も、甚内と云うのではなかつたでしょうか？ そのほか三条河原さんじようがわらの喧嘩けんかに、甲比丹ピタン「まるどなど」を救つた虚無僧こむそう、堺さかいの妙国寺みようこくじ門前に、南蛮なんぱんの薬を売っていた商人、……そう云うものも名前を明かせば、何がし甚内だつたのに違いありません。いや、それよりも大事な

のは、去年この「さん・ふらんしすこ」の御寺みでらへ、おん母「まりや」の爪を収めた、黄金おうごんの舍利塔しやりとうを献じているのも、やはり甚内と云う信徒だった筈です。

しかし今夜は残念ながら、一々そう云う行状を話している暇はありません。ただどうか阿媽港あまかわじんない甚内は、世間一般の人間と余り変りのない事を信じて下さい。そうですか？ では出来るだけ手短かに、わたしの用向きを述べる事にしましょう。わたしはある男の魂のために、「みさ」の御祈りを願いに来たのです。いや、わたしの血縁のものではありません。と云つてもまたわたしの刃は金かねに、血を塗つたものでもないのです。名前ですか？ 名前は、

——さあ、それは明かして好いいかどうか、わたしにも判断はつき

ません。ある男の魂のために、——あるいは「ぼうろ」と云う日本人のために、冥福めいふくを祈つてやりたいのです。いけませんか？——なるほど阿媽港甚内に、こう云う事を頼まれたのでは、手軽に受合う気にもなれますまい。ではとにかく一通り、事情だけは話して見る事にしましょう。しかしそれには生死を問わず、他言たごんしない約束が必要です。あなたはその胸の十字架くるすに懸けても、きつと約束を守りますか？ いや、——失礼は赦ゆるして下さい。（微笑）伴天連ぼてれんのあなたを疑うのは、盗人ぬすびとのわたしには僭せんじょう上じょうでしよう。しかしこの約束を守らなければ、（突然真面目まじめに）「いんへるの」の猛火に焼かれずとも、現世げんぜに罰ばちが下くだる筈はずです。

もう二年あまり以前の話ですが、ちようどある夙こがらしの真夜中です。

わたしは雲うんすい水みづに姿を変えながら、京の町まち中なかをうろついています。京の町中をうろついていたのは、その夜よに始はじまったのではありません。もうかれこれ五日ばかり、いつも初しよこう更こうを過ぎさえすれば、必ず人目に立たないように、そつと家々を窺うかがつたのです。勿論何のためだったかは、註を入れるにも及びますまい。殊にその頃は摩利伽まりかへでも、一時渡っているつもりでしたから、余計に金かねの入用もあつたのです。

町は勿論とうの昔に人通りを絶とっていました。星ばかりきらめいた空中には、小おやみもない風の音がどよめいています。わたしは暗い軒のきづた通といに、小川おがわ通とりを下くだつて来ると、ふと辻を一つ曲まがつた所に、大きい角屋敷かどやしきのあるのを見つけました。これは京

でも名を知られた、北条屋弥三右衛門の本宅です。同じ渡海を渡世にしても、北条屋は到底角倉などと肩を並べる事は出来ずまい。しかしとにかく沙室や呂宋へ、船の一二艘も出ているのですから、一かどの分限者には違いありません。わたしは何もこの家を目当に、うろついていたのではないのですが、ちようどそこへ来合わせたのを幸い、一稼ぎする気を起しました。その上前にも云つた通り、夜は深いし風も出ている、——わたしの商売にとりかかるとには、万事持つて来いの寸法です。わたしは路ばたの天水桶の後に、網代の笠や杖を隠した上、たちまち高堀を乗り越えました。

世間の噂を聞いて御覧なさい。

阿媽港甚内は、忍術を使う、

——誰でも皆そう云っています。しかしあなたは俗人のように、そんな事は本当だと思いますまい。わたしは忍術も使わなければ、悪魔も味方にはしていません。ただ阿媽港あまかわにいた時分、葡ポルト萄ガル牙の船の医者に、究理の学問を教わりました。それを実地に役立てさえすれば、大きい錠前ねをじ切ったり、重い門かぬきを外したりするのは、格別むずかしい事ではありません。（微笑）今までにない盗みの仕方、——それも日本にっぽんと云う未開の土地は、十字架や鉄砲の渡来と同様、やはり西洋に教わったのです。

わたしは一ときとたたない内に、北条屋の家の中うちにはいつていました。が、暗い廊下ろうかをつき当たると、驚いた事にはこの夜更よふけにも、まだ火影ほかげのさしているばかりか、話し声のする小座敷があり

ます。それがあたりの容子ようすでは、どうしても茶室に違いありません。「こがらし凧の茶か」——わたしはそう苦笑くしやうしながら、そつとそこへ忍び寄りました。実際その時は人声のするのに、仕事の邪魔じやまを思うよりも、数寄すきを凝らした囲いの中に、この家の主人やや客に來た仲間が、どんな風流を楽しんでいるか？——そんな事に心が惹ひかれたのです。

ふすま襖の外に身を寄せるが早いか、わたしの耳には思った通り、釜かまのたぎりがはいました。が、その音がすると同時に、意外にも誰か話をしては、泣いている声が聞えるのです。誰か、——と云うよりもそれは二度と聞かずに、女だと云う事さえわかりました。こう云う大家たいけの茶座敷に、真夜中女の泣いていると云うのは、ど

うせただ事ではありません。わたしは息をひそめたまま、幸い明
 いていた襖ふすまの隙すきから、茶室の中を覗のぞきこみました。

行燈あんどんの光に照された、古色紙こしきしらしい床とこの懸け物、懸け花はないれ入

の霜菊しもぎくの花。——かこ囲いの中には御約束通り、物寂びた趣が漂つ

ていました。その床の前、——ちようどわたしの真ま正面しょうめんに坐つ

た老人は、主人の弥三やそうえもん右衛門でしょう、何か細こまかい唐草からくさの羽織

に、じつと両腕を組んだまま、ほとんどよそ眼に見たのでは、釜

の煮にえ音でも聞いているようです。弥三右衛門の下座しもざには、品ひんの

好いい筍こうがいまげ 鬚ひげの老女が一人、これは横顔を見せたまま、時々涙を

拭ぬぐっていました。

「いくら不自由がないようでも、やはり苦勞だけはあると見える

。「——わたしはそう思いながら、自然と微笑を洩もらしたものです。微笑を、——こう云つてもそれは北条屋夫婦ほうじょうやに、悪意があつたのではありません。わたしのように四十年間、悪あく名みやうばかり負つているものには、他人の、——殊に幸福らしい他人の不幸は、自然と微笑を浮うばせるのです。（残酷な表情）その時もわたしは夫婦の歎なげきが、歌舞伎かぶきを見るように愉快えんかいだったのです。（皮肉な微笑）しかしこれはわたし一人に、限かぎつた事ではありません。いい。誰にも好まれる草紙そうしと云えば、悲しい話にきまつているようです。

弥三右衛門はしばらくの後のち、吐息といきをするようにこう云いました。「もうこの羽目はめになつた上は、泣ないても喚わめいても取返しはつかない。

い。わたしは明日にも店のものにも、暇ひまをやる事に決心をした。」

その時また烈しい風が、どつと茶室を揺ゆすぶりしました。それに声まぎが紛れたのでしよう。弥三右衛門の内儀ないぎの言葉は、何と云ったのだからわかりません。が、主人は領うなずきながら、両手を膝の上に組み合あせると、網代あじろの天井へ眼を上げました。太い眉まゆ、尖ほった頬ほ骨ね、殊ねに切れの長い目尻、——これは確かに見れば見るほど、いつか一度は会っている顔です。

「おん主あるじ、『えす・きりすと』様。何とぞ我々夫婦の心に、あなた様の御力を御恵み下さい。……」

弥三右衛門は眼を閉じたまま、御祈りの言葉を呟つぶやき始めました。老女もやはり夫のように天帝の加護を乞うているようです。わた

しはその間あいだ瞬きもせず、弥三右衛門の顔を見続けました。するとまたこがらし凧の渡った時、わたしの心に閃ひらめいたのは、二十年以前の記憶です。わたしはこの記憶の中に、はつきり弥三右衛門の姿を捉とらえました。

その二十年以前の記憶と云うのは、——いや、それは話すには及びますまい。ただ手短にほんに事実だけ云えば、わたしは阿媽港あまかわに渡っていた時、ある日本の船頭あやうに危い命を助けて貰いました。その時は互に名乗りもせず、それなり別れてしまいましたが、今わたしの見た弥三右衛門は、当年の船頭に違いないのです。わたしは奇遇きんぐうに驚きながら、やはりこの老人の顔を見守っていました。そう云えば威いかつい肩のあたりや、指節ゆびふしの太い手の恰好かつこうには、

未いまださんごしに珊瑚礁しょうごうの潮しほけむりや、白檀山びやくだんやまの匂においがしみています。
 です。

弥三右衛門は長い御祈りを終ると、静かに老女へこう云いました。

「跡はただ何事も、天主てんしゆの御意次第ぎよいと思うたが好よい。——では釜のたぎっているのを幸い、茶でも一つ立てて貰もらおうか？」

しかし老女は今更のように、こみ上げる涙を堪こらえるように、消え入りそうな返事をしました。

「はい。——それでもまだ悔くやしいのは、——」

「さあ、それが愚痴ぐちと云うものじゃ。北条丸ほうじょうまるの沈しずんだのも、

抛なげ銀ぎんの皆倒れたのも、——」

「いえ、そんな事ではございません。せめてはせがれの弥三郎やさぶろうでも、
いてくれればと思うのでございますが、……」

わたしはこの話を聞いている内に、もう一度微笑が浮んで来ま
した。が、今度は北条屋ほうじょうやの不運に、愉快を感じたものではありま
せん。「昔の恩を返す時が来た」——そう思う事が嬉しかったの
です。わたしにも、御尋ね者の阿媽港あまかわじんない甚内しんないにも、立派りっぱに恩返し
が出来る愉快さは、——いや、この愉快さを知るものは、わたし
のほかにはありませんまい。(皮肉に)世間の善人は可哀そうです。
何一つ悪事を働かない代りに、どのくらい善行ほどこを施した時には、
嬉しい心もちになるものか、——そんな事も碌ろくには知らないので
すから。

「何、ああ云う人でなしは、居らぬだけにまだしも仕合せなぐらいじや。……」

弥三右衛門は苦々にがにがしそうに、行燈あんどんへ眼を外そらせました。

「あいつが使いおった金でもあれば、今度も急場しだけは凌しのげたかも知れぬ。それを思えば勘当かんどうしたのは、……」

弥三右衛門はこう云つたなり、驚いたようにわたしを眺めました。これは驚いたのも無理はありません。わたしはその時声もかけずに、堺さかいの襖ふすまを明けたのですから。——しかもわたしの身なりと云えば、雲水うんすいに姿をやつした上、網代あじろの笠かさを脱いだ代りに、南蛮頭巾なんばんずきんをかぶっていたのですから。

「誰だ、おぬしは？」

弥三右衛門は年はとつていても、咄嗟とつさに膝を起しました。

「いや、御驚きになるには及びません。わたしは阿媽港甚内と云うものです。——まあ、御静かになすつて下さい。阿媽港甚内はぬすびと盗人ですが、今夜突然参上したのは、少しほかにも訣わけがあるのです。——」

わたしは頭巾ずきんを脱ぎながら、弥三右衛門の前に坐りました。

その後の事のちは話さずとも、あなたには推察出来るでしょう。わたしは北条屋ほうじょうやの危急ききゆうを救うために、三日と云う日限にちげんを一日も違えず、六千貫かねの金を調達する、恩返しの約束を結んだのです。

——おや、誰か戸の外に、足音が聞えるではありませんか？ で今夜は御免下さい。いずれ明日あすか明後日あさっての夜よる、もう一度ここへ

しの
忍んで来ます。あの^{おおくるす}大十字架の星の光は阿媽港^{あまかわ}の空には輝いてい
ても、日本^{にっぽん}の空には見られません。わたしもちょうどああ云うよ
うに日本では姿を晦^{くら}ませていないと、今夜「みさ」を願いに来た、
「ぼうろ」の魂のためにもすまないのです。

何、わたしの逃げ途^{みち}ですか？ そんな事は心配に及びません。
この高い天窓^{てんまど}からでも、あの大きい暖炉^{だんろ}からでも、自由自在に
出て行かれます。ついてはどうか呉^{くれ}々^{ぐれ}も、恩人「ぼうろ」の魂
のために、一切他言^{たごん}は慎^{つつし}んで下さい。

北条屋弥三右衛門の話

伴天連様ばてれん。どうかわたしの懺悔ざんげを御聞き下さい。御承知でも御座いませうが、この頃世上に噂うわさの高い、阿媽港甚内あまかわじんないと云う盗ぬすびと人がございます。根来寺ねごろでらの塔に住んでいたのも、殺生関せつしようかん白ぱくの太刀たちを盗んだのも、また遠い海の外そとでは、呂宋るそんの太守を襲からつたのも、皆あの男だとか聞き及びました。それがとうとう擲なめとられた上、今度一条戻り橋もどばしのほとりに、曝さらし首くびになつたと云う事も、あるいは御耳にはいつて居りましょう。わたしはあの阿媽港甚内ひとかたに一方ひとかたならぬ大恩を蒙こうむりました。が、また大恩を蒙あつただけに、ただ今では何とも申しようのない、悲しい目にも遇あつたのでございます。どうかその仔細しさいを御聞きの上、罪ほうじびと北条屋弥やそうえもん三右衛門もんにも、天帝の御愛憐を御祈り下さい。

ちようど今から二年ばかり以前の、冬の事でございます。ずっとしければかり続いたために、持ち船の北条丸ほうじょうまるは沈みますし、抛なげ銀は皆倒れますし、——それやこれやの重なった揚句あげく、北条屋一家は分散のほかには、仕方のない羽目はめになつてしまいました。御承知の通り町人には取引き先はございまして、友だちと申すものはございけません。こうなればもう我々の家業は、うず潮に吸われた大船おおぶねも同様、まつ逆さまさかに奈落ならくの底へ、落ちこむばかりなのでございます。するとある夜、——今でもこの夜の事よは忘れません。ある凧こがらしの烈よるしい夜でございましたが、わたし共夫婦は御存知の圀かこいに、夜の更ふけるのも知らず話して居りました。そこへ突然はいつて参つたのは、雲水うんすいの姿なりに南蛮頭巾なんばんずきんをかぶつた、

あの阿媽港あまかわじんない甚内いでございます。わたしは勿論驚きもすれば、また怒りいかも致しました。が、甚内の話を聞いて見ますと、あの男はやはり盗みを働きに、わたしの宅へ忍びこみましたが、茶室にはいまだほかけ未いに火影ばかりか、人の話し声が聞えている、そこで襖ふすまご越しに、覗のぞいて見ると、この北条屋弥三右衛門は、甚内の命を助けた事のある、二十年以前の恩人だったと、こう云う次第ではございませんか？

なるほどそう云われて見れば、かれこれ二十年にもなりましようか、まだわたしが阿媽港あまかわ通いの「ふすた」船の船頭を致していた頃、あそこへ船がかりをしている内に、髭ひげさえ碌ろくにない日本人を一人、助けてやった事がございます。何でもその時の話では、

ふとした酒の上の喧嘩けんかから、唐人とうじんを一人殺したために、追手おつてがかかったとか申して居りました。して見ればそれが今日こんにちでは、あの阿媽港甚内と云う、名代なだいの盗人ぬすびとになつたのでございませう。わたしはとにかく甚内の言葉も嘘ではない事がわかりましたから、一家のものの寝ているのを幸い、まずその用向きを尋ねて見ました。

すると甚内の申しますには、あの男の力に及ぶ事なら、二十年前の恩返しに、北条屋の危急を救つてやりたい、差当りさしあたり入用いりようの金子きんすの高は、どのくらいだと尋ねるのでございませう。わたしは思わず苦笑くしやう致しました。盗人に金を調達して貰う、——それが可笑おかしいばかりではございませぬ。いかに阿媽港甚内でも、

そう云う金があるくらいならば、何もわざわざわたしの宅へ、盗みにはいるにも当りますまい。しかしその金きんだか高を申しますと、甚内は小首こくびを傾けながら、今夜の内にはむずかしいが、三日も待てば調達しようと、無造作むぞうさに引き受けたのでございます。が、何しろ入用なのは、六千貫と云う大金でございませうから、きつと調達出来るかどうか、当てあになるものではございません。いや、わたしの量りょうけん見では、まず賽さいの目をたのむよりも、覚おぼつか束ないと覚悟をきめていました。

甚内はその夜よわたしの家内に、悠々と茶なぞ立てさせた上こがらし、風呂の中を帰って行きました。が、その翌日になつて見ても、約束の金は届きません。二日目も同様でございました。三日目は、――

この日は雪になりましたが、やはり夜よに入ってしまった後のちも、何一つ便りはありません。わたしは前に甚内の約束は、当にして居らぬと申し上げました。が、店のものにも暇ひまを出さず、成行きに任まかせていた所を見ると、それでも幾分か心待ちには、待つていたのでございましょう。また実際三日目の夜よには、困いの行燈あんどんに向つていても、雪折れの音のする度毎に、聞き耳ばかり立てて居りました。

所ところが三更さんこうも過ぎた時分、突然茶室ちやむの外の庭にに、何か人の組み合あうらしい物音が聞えるではございせんか？ わたしの心こゝろに閃ひらめいたのは、勿論もちろん甚内の身の上でございます。もしや捕とり手てでもかかったのではないか？——わたしは咄嗟とつさにこう思いましたから、

庭に向いた障子しょうじを明けるが早いか、行燈あんどんの火を掲かげて見ました。雪の深い茶室の前には、大明竹だいみんちくの垂れ伏したあたりに、誰か二人つか掴み合っている——と思うとその一人は、飛びかかる相手突き放したなり、庭木の陰かげをくぐるように、たちまち堀ほりの方へ逃げ出しました。雪のはだれる音、堀ほりに攀よじ登る音、——それぎりひっそりしてしまつたのは、もうどこか堀ほりの外へへ、無事に落ち延びたのでございましょう。が、突き放された相手の一人は、格別跡を追おうともせず、体の雪を払いながら、静かにわたしの前へ歩み寄りました。

「わたしです。阿媽港あまか甚内じんないですよ。」

わたしは呆氣あっけにとられたまま、甚内の姿を見守りました。甚内

は今夜も南蛮頭巾なんばんずきんに、袈裟法衣けさころもを着ているのでございます。

「いや、とんだ騒さわぎをしました。誰もあの組打ちくみうちの音に、眼を覚さねば仕合せですが。」

甚内かこは困こいへはいると同時に、ちらりと苦笑くしょうを洩もらしました。「何、わたしが忍しのんで来ると、ちようど誰かこの床ゆかの下へ、這はいこもうとするものがあるのです。そこで一つ手捕てとりにした上、顔を見てやろうと思つたのですが、とうとう逃げられてしまいました。」

わたしはまださつきを通り、捕り手の心配がございましたから、役人ではないかと尋たずねて見ました。が、甚内は役人どころか、盗人だと申すのでございます。盗人が盗人を捉とらえようとした、――

このくらい珍しい事はございますまい。今度は甚内よりもわたしの顔に、自然と苦笑が浮びました。しかしそれはともかくも、調達の成否を聞かない内は、わたしの心も安まりません。すると甚内は云わない先に、わたしの心を読んだのでございましょう、悠悠々と胴巻をほどこきながら、炉の前へ金包みを並べました。

「御安心なさい、六千貫の工面はつきましたから。——実はもう昨日の内に、大抵調達したのですが、まだ二百貫ほど不足でしたから、今夜はそれを持って来ました。どうかこの包みを受け取って下さい。また昨日までに集めた金は、あなた方御夫婦も知らない内に、この茶室の床下へ隠して置きました。大方今夜の盗人のやつも、その金を嗅ぎつけて来たのでしよう。」

わたしは夢でも見ているように、そう云う言葉を聞いていました。盗人に金を施ほどこして貰う、——それはあなたに伺わないでも、確かに善い事ではございますまい。しかし調達が出来るかどうか、半信半疑の境さかいにいた時は、善悪も考えずに居りましたし、また今となつて見れば、むげに受け取らぬとも申されません。しかもその金を受け取らないとなれば、わたしばかりか一家のものも、路ろ頭に迷うのでございます。どうかこの心もちに、せめては御憐ごれんぴ憫んを御加え下さい。わたしはいつか甚内の前に、恭うやうやしく両手を

ついたまま、何も申さずに泣いて居りました。……

その後のちわたしは二年の間あいだ、甚内の噂うわさを聞かずに居りました。が、とうとう分散もせずつつがに恙つつがないその日を送られるのは、皆甚内の御

蔭でございますから、いつでもあの男の仕合せのために、人知れずおん母「まりや」様へも、祈願きがんをこめていたのでございます。ところがどうでございましょう、この頃往來おうらいの話聞けば、阿媽あま港まか甚内わじんないは御召捕りおめしとの上、戻り橋もどに首を曝さらしていると、こう申すではございませんか？ わたくしは驚きも致しました。人知れず涙も落しました。しかし積悪むくいの報と思えば、これも致し方はございますまい。いや、むしろこの永年、天罰も受けずに居りましたのは、不思議だつたくらいでございます。が、せめてもの恩返しに、陰かげながら回向えこうをしてやりたい。——こう思つたものでございますから、わたしは今日伴きょうどうとももつれずに、早速一条戻り橋へ、その曝し首を見に参りました。

戻り橋のほとりへ参りますと、もうその首を曝した前には、大勢人がたかつて居ります。罪状を記した白木の札、首の番をすする下役人——それはいつもと変りません。が、三本組み合せた、青竹の上に載せてある首は、——ああ、そのむごたらしい血まみれの首は、どうしたと云うのでございましょう？ わたしは騒々しい人だかりの中に、蒼ざめた首を見るが早いか、思わず立ちすくんでしまいました。この首はあの男ではございけません。阿媽港甚内の首ではございません。この太い眉、この突き出た頬、この眉間の刀創、——何一つ甚内には似て居りません。しかし、——わたしは突然日の光も、わたしのまわりの人だかりも、竹の上に載せた曝し首も、皆どこか遠い世界へ、流れてしまった

かと思うくらい、烈しい驚きに襲われました。この首は甚内ではございませぬ。わたしの首でございます。二十年以前のわたし、——ちようど甚内の命を助けた、その頃のわたしでございます。

「弥三郎！——わたしは舌さえ動かさせたなら、こう叫んでいたかも知れませぬ。が、声を揚げるどころかわたしの体は瘡を病んだように、震えているばかりでございました。」

弥三郎！ わたしはただ幻のように、倅せがれの曝し首を眺めました。首はやや仰向あおむいたまま半ば開いた眶まぶたの下から、じつとわたしを見守つて居ります。これはどうした訣わけでございましょう？ 倅は何かの間違いから、甚内と思われたのでございましょうか？ しかし御吟味ごぎんみも受けたとすれば、そう云う間違いは起りますまい。そ

れとも阿媽港甚内というのは、倅だったのでございませうか？

わたしの宅へ来たにせうんすい贗雲水は、誰か甚内の名前を仮りた、別人

だったのでございませうか？ いや、そんな筈はございませぬ。

三日と云う日にちげん限を一日もたが違えず、六千貫の金を工面くめんするものは、

この広い日本の国にも、甚内のほかに誰が居りませう？ して

見ると、——その時わたしの心の中には、二年以前雪の降った夜よ、

甚内と庭に争っていた、誰とも知らぬ男の姿が、急にはつきり浮

んで参りました。あの男は誰だったのでございませう？ もし

や倅ではございませうか？ そう云えばあの男の姿かたちは、

ちらりと一目見ただけでも、どうやら倅の弥三郎に、似ていたよ

うでもございませぬ。しかしこれはわたし一人の、心の迷いでござ

いましうか？　もし倅だったとすれば、——わたしは夢の覚め
たように、しけじけ首を眺めました。するとその紫ばんだ、妙に
緊しまりのない唇くちびるには、何か微笑ほほえみに近い物が、ほんのり残っている
のでございます。

曝さらし首に微笑が残っている、——あなたはそんな事を御聞きに
なると、御晒おわらいになるかも知れません。わたしさえそれに気のつ
いた時には、眼のせいかとも思いました。が、何度見直しても、
その干ひからびた唇には、確かに微笑らしい明あかるみが、漂ただよっているの
でございます。わたしはこの不思議な微笑に、永あいだい間見入って居
りました。と、いつかわたしの顔にも、やはり微笑が浮んで参り
ました。しかし微笑が浮ぶと同時に、眼には自然と熱い涙も、に

じみ出して来たのでございます。

「お父さん、勘忍して下さい。——」

その微笑は無言の内に、こう申していたのでございます。

「お父さん。不孝の罪は勘忍して下さい。わたしは二年以前の雪の夜、勘当の御詫びがしたいばかりに、そつと家へ忍んで行きましました。昼間は店のものに見られるのさえ、恥しいなりをいたしましたから、わざわざ夜の更けるのを待った上、お父さんの寝間の戸を叩いても、御眼にかかるつもりでいたのです。ところがふと囲いの障子に、火影のさしているのを幸い、そこへ怯ず怯ず行きかけると、いきなり誰か後から、言葉もかけずに組つきました。

「お父さん。それから先はどうなったか、あなたの知っている通

りです。わたしは余り不意だったため、お父さんの姿を見るが早
いか、相手の曲者くせものを突き放したなり、高堀たかべいの外へ逃げてしま
いました。が、雪明ゆきあかりに見た相手の姿は、不思議にも雲水うんすいの
ようでしたから、誰も追う者のないのを確かめた後のち、もう一度あ
の茶室の外へ、大胆だいたんにも忍んで行つたのです。わたしは困いの
障子越しに、一切いっさいの話を立ち聞きました。

「お父さん。北条屋ほうじょうやを救つた甚内じんないは、わたしたち一家の恩人
です。わたしは甚内の身に危急ききゆうがあれば、たとえ命は抛なげうつても、
恩に報いたいと決心しました。またこの恩を返す事は、勘当を受
けた浮浪人ふろうにんのわたしでなければ出来ません。わたしはこの二
年間、そう云う機会を待っていました。そうして、——その機会

が来たのです。どうか不孝の罪は勘忍して下さい。わたしは極道ごくどうに生れましたが、一家の大恩だけは返しました。それがせめてもの心やりです。……」

わたしは宅へ帰る途中も、同時に泣いたり笑ったりしながら、せがれ倅のけなげさを褒めてやりました。あなたは御存知になりますまいが、倅の弥三郎やさぶろうもわたしと同様、御宗門ごしゅうもんに帰依きえして居りましたから、もとは「ぼうろ」と云う名前さえも、頂いて居ったものでございます。しかし、——しかし倅も不運なやつでございませした。いや、倅ばかりではございません。わたしもあの阿媽港あまかわじん甚内ないに一家の没落さえ救われなければ、こんな嘆きは致しますまいに。いくら未練みれんだと思いましたが、こればかりは切せつのうござい

います。分散せず^よにいた方が好いか、倅を殺さずに置いた方が好いか、——（突然苦しそうに）どうかわたしを御救い下さい。わたしはこのまま生きていけば、大恩人の甚内を憎むようになるかも知れません。……（永い間の^{あいだ} 歎^{すすりなき} 歎）

「ぼうろ」弥三郎の話

ああ、おん母「まりや」様！ わたしは夜が明け次第、首を打たれる事になっています。わたしの首は地に落ちても、わたしの魂は小鳥のように、あなたの御側へ飛んで行くでしょう。いや、悪事ばかり働いたわたしは、「はらいそ」（天国）の莊^{しょうごん} 嚴^{いん}を

拝する代りに、恐しい「いんへるの」（地獄）の猛火の底へ、逆さか落かおとしになるかも知れません。しかしわたしは満足です。わたしの心には二十年来、このくらい嬉しい心もちは、宿った事がないのです。

わたしは北条屋弥三郎ほうじょうややさぶろうです。が、わたしの曝さらし首くびは、阿媽港甚内あまかとわじんない呼よばれるでしょう。わたしがあの阿媽港甚内、——これほど愉快ゆかいな事があるでしょうか？ 阿媽港甚内、——どうです？ 好いい名前ではありませんか？ わたしはその名前を口にするだけでも、この暗くろい牢ろうの中さえ、天上てんじやうの薔薇ばらや百合ゆりの花に、満ち渡るような心もちがします。

忘れもしない二年前ぜんの冬、ちようどある大雪おほゆきの夜よるです。わたし

は博奕ばくちの元手もとが欲しさに、父の本宅へ忍びこみました。ところがまだ囲いの障子しょうじに、火影ほかげがさしていましたから、そつとそこを窺うかがおうとすると、いきなり誰か言葉もかけず、わたしの襟えりがみ上うへを捉とらえたものがあります。振り払う、また掴つかみかかる、——相手は誰だか知らないのですが、その力の逞たくましい事は、到底ただものとは思われません。のみならず二三度揉もみ合う内に、茶室の障子が明あいたと思うと、庭へ行燈あんどんをさし出したのは、紛まぎれもない父の弥三右衛門やそうえもんです。わたしは一生懸命に、掴つかまれた胸むな倉ぐらを振り切りながら、高塀たかべの外へ逃げ出しました。

しかし半町はんちようほど逃げ延びると、わたしはある軒下のきしたに隠れながら、往来の前後を見廻しました。往来には夜目しろじろにも白々と、

時々雪煙りが揚るあがほかには、どこにも動いているものは見えません。相手は諦めてしまったのか、もう追いかけても来ないようです。が、あの男は何ものでしょう？ 咄嗟とつさの間あいだに見た所では、確かに僧そうぎ形ようをしていました。が、さっきの腕の強さを見れば、——殊に兵法にも精くわしいのを見れば、世の常の坊主ではありませんまい。第一こう云う大雪の夜よに、庭先へ誰か坊主ぼうずが来ている、——それが不思議ではありませんか？ わたしはしばらく思案した後のち、たとい危あぶない芸当にしても、とにかくもう一度茶室の外へ、忍び寄る事に決心しました。

それから一いつ時ときばかりたった頃ころです。あの怪しい行脚あんぎゃの坊主ぼうずは、ちようど雪の止んだのを幸い、小川おがわ通りを下くだつて行きまし

た。これが阿媽港甚内あまかわじんないなのです。侍さむらい、連歌師れんがし、町人ちやうじん、虚無僧こむそう、

——何にでも姿を変えると云う、洛中らくちゆうに名高い盗人ぬすびとなので

す。わたしは後あとから見え隠れに甚内の跡をつけて行きました。そ

の時ほど妙に嬉しかった事は、一度もなかつたのに違いありません。

阿媽港甚内！ 阿媽港甚内！ わたしはどのくらい夢うちの中に

も、あの男の姿を慕つていたでしょう。殺生せつしよう関白かんぱくの太刀たちを盗

んだのも甚内です。沙室屋しゃむろやの珊瑚樹さんごじゆを詐かたつたのも甚内です。

備前びぜん宰相さいしやうの伽羅きやらを切つたのも、甲比丹カピタン「ペれいら」の時計を

奪つたのも、一夜いちやに五つの土蔵を破つたのも、八人の参河みかわ侍ざむらい

を斬り倒したのも、——そのほか末代にも伝わるような、稀有けうの

悪事を働いたのは、いつでも阿媽港甚内あまかわじんないです。その甚内は今わ

たしの前に、網代あじろの笠を傾けながら、薄明るい雪路を歩いている。——こう云う姿を眺められるのは、それだけでも仕合せではありませんか？ が、わたしはこの上にも、もつと仕合せになりたかつたのです。

わたしは浄厳寺じょうごんじの裏へ来ると、一散いっさんに甚内へ追いつきました。ここはずつと町家ちやうかのない土塀どべい続きになっていますから、たとい昼でも人目を避けるには、一番御おあつら誂あつらえの場所なのですが、甚内はわたしを見て、格別驚いた気色けしきは見せず、静かにそこへ足を止めました。しかも杖つえをついたなり、わたしの言葉を待つように、一ひとこと言も口を利きかないのです。わたしは實際恐る恐る、甚内の前に手をつきました。しかしその落着いた顔を見ると、思う

ように声さえ出て来ません。

「どうか失礼は御免下さい。わたしは北条屋弥三右衛門の倅弥

三郎と申すものです。——」

わたしは顔を火照らせながら、やつところ口を切りました。

「実は少し御願いがあつて、あなたの跡を慕つて来たのですが、

……」

甚内はただ領きました。それだけでも気の小さいわたしには、

どのくらい難ありがた有ありいが気がしたでしょう。わたしは勇氣も出て来ま

したから、やはり雪の中に手をついたなり、父の勘かん当とうを受けて

いる事、今はあぶれものの仲間にはいつている事、今夜父の家うちへ

盗みにはいった所が、計はからず甚内にめぐり合つた事、なおまた父

と甚内との密談も一つ残らず聞いた事、——そんな事を手短かに話しました。が、甚内は不相変、默然と口を噤んだまま、冷やかにわたしを見ていますのです。わたしはその話をしてしまうと、一層膝を進ませながら、甚内の顔を覗きこみました。

「北条一家の蒙った恩は、わたしにもまたかかっています。」

わたしはその恩を忘れないしるしに、あなたの手下になる決心をしました。どうかわたしを使って下さい。わたしは盗みも知っています。火をつける術も知っています。そのほか一通りの悪事だけは、人に劣らず知っています。——」

しかし甚内は黙っています。わたしは胸を躍らせながら、いよいよ熱心に説き立てました。

「どうかわたしを使つて下さい。わたしは必ず働きます。京、伏見しみさかい、堺さかい、大阪、——わたしの知らない土地はありません。わたしは一日に十五里歩きます。力も四斗しとびょう俵は片手に挙あがります。人も二三人は殺して見ました。どうかわたしを使つて下さい。わたしはあなたのためならば、どんな仕事でもして見せます。伏見の城しろくじやくの白孔雀も、盗めと云えば、盗んで来ます。『さん・ふらんしすこ』の寺の鐘しゆろう楼も、焼けと云えば焼いて来ます。右大臣家の姫君も、拐かどわかせと云えば拐して来ます。奉行の首も取れと云えば、

——

わたしはこう云いかけた時、いきなり雪の中へ蹴倒けたおされました。

「莫迦ばかめ！」

甚じんない内は一声叱つたまま、元の通り歩いて行きそうにします。

わたしはほとんど気違ひのように法衣ころもの裾すそへ縋すがりつきました。

「どうかわたしを使つて下さい。わたしはどんな場合にも、きつとあなたを離れません。あなたのためには水火にも入ります。あの『えそぼ』の話の獅子王ししおうさえ、鼠ねずみに救われるではありませんか？ わたしはその鼠になります。わたしは、——」

「黙れ。甚内は貴様なぞの恩は受けぬ。」

甚内はわたしを振り放すと、もう一度そこへ蹴倒しました。

「白びやくらい癩らいめが！ 親孝行でもしろ！」

わたしは二度目に蹴倒された時、急に口惜くやしさがこみ上げて来ました。

「よし！ きつと恩になるな！」

しかし甚内は見返りもせず、さつさと雪路ゆきみちを急いで行きます。いつかさし始めた月の光に網代あじろの笠かさを仄ほのめかせながら、……それぎりわたしは二年の間あいだ、ずっと甚内を見ずにいるのです。（突然笑う）「甚内は貴様なぞの恩は受けぬ」……あの男はこう云いました。しかしわたしは夜よの明け次第、甚内の代りに殺されるのです。

ああ、おん母「まりや様！」わたしはこの二年間、甚内の恩を返したさに、どのくらい苦しんだか知れませんが。恩を返したさに？——いや、恩と云うよりも、むしろ恨うらみを返したさにです。しかし甚内はどこにいるか？ 甚内は何をしているか？——誰にそれ

がわかりましたしょう？ 第一甚内はどんな男か？——それさえ知つてゐるものではありません。わたしが遇つたあ麿雲水にせうんすいは四十前後の小男です。が、柳町やなぎまちの廓くるわにいたのは、まだ三十を越えていない、赧あから顔ひげに鬚ひげの生えた、浪人だと云うではありませんか？ 歌舞伎ぶきの小屋さわを擾さわがしたと云う、腰の曲つた紅毛人こうもうじん、妙国寺みょうこくじの財宝ざいほうを掠かすめたと云う、前髪まへかみの垂れた若侍わかし、——そう云うのを皆甚内とすれば、あの男の正しょうたい体たいを見分ける事さえ、到底とうてい人力にんりきには及ばない筈です。そこへわたしは去年の末から、吐血とけつの病びょうに罹かかつてしまいました。

どうか恨うらみを返してやりたい、——わたしは日毎ひごとに瘦やせ細りながら、その事ばかりを考えていました。するとある夜わたしの心

に、突然閃ひらめいた一策があります。「まりや」様！ 「まりや」様！ この一策を御教え下さったのは、あなたの御恵みに違いありません。ただわたしの体を捨てる、吐血とけつの病に衰え果てた、骨と皮ばかりの体を捨てる、——それだけの覚悟をしさえすれば、わたしの本望は遂げられるのです。わたしはその夜嬉よしさの余り、いつまでも独り笑いながら、同じ言葉を繰返していました。——「甚内の身代みがわりに首を打たれる。甚内の身代りに首を打たれる。……」

甚内の身代りに首を打たれる——何とすばらしい事ではありませんか？ そうすれば勿論わたしと一しよに、甚内の罪も亡ほろんでしまう。——甚内は広い日本国中にっぽん、どこでも大威張おおいばりに歩けるの

です。その代り（再び笑う）——その代りわたしは一夜の内に、
 稀代きだいの大賊たいぞくになれるのです。呂宋助左衛門るそんすけざえもんの手代てだいだったのも、
 備前びぜん宰相さいしやうの伽羅きやらを切つたのも、利休居士りきゆうこじの友だちになつたの
 も、沙室屋しゃむろやの珊瑚樹さんごじゆを詐かたつたのも、伏見の城の金蔵かねぐらを破つ
 たのも、八人の参河侍みかわざむらいを斬り倒したのも、——ありとあらゆる
 甚内さんないの名誉は、ことごとくわたしに奪うばわれるのです。（三度笑
 う）云わば甚内さんないを助けると同時に、甚内さんないの名前を殺してしまふ、
 一家の恩を返すと同時に、わたしの恨みうらみも返してしまふ、——こ
 のくらい愉快な返報へんぽうはありません。わたしがその夜よ嬉よろこしさの余
 り、笑い続けたのも当然です。今でも、——この牢ろうの中でも、こ
 れが笑わずにいられるでしょうか？

わたしはこの策を思いついた後、内裏へ盗みにはいりました。
宵闇よいやみの夜よの浅い内ですから、御簾越みすしに火影ほかげがちらついたり、
松の中に花だけ仄ほのめいたり、——そんな事も見たように覚えてい
ます。が、長い廻廊かいろうの屋根から、人気ひとけのない庭へ飛び下りると、
たちまち四五人の警護けいごの侍に、望みの通り擲からめられました。その
時です。わたしを組み伏せた鬚ひげ侍むらいは、一生懸命なわに縄をかけな
がら、「今度こそは甚内を手捕りにしたぞ」と、眩つぶやいていたでは
ありませんか？　そうです。阿媽港あまかわ甚内じんないのほかに、誰が内裏だいりな
ぞへ忍びこみましよう？　わたしはこの言葉を聞くと、必死にも
がいている間あいだでも、思わず微笑びしょうを洩あらしたものです。

「甚内は貴様なぞの恩にはならぬ。」——あの男はこう云いまし

た。しかしわたしは夜の明け次第、甚内の代りに殺されるのです。何と云う気味の好い面当てでしょう。わたしは首を曝されたまま、あの男の来るのを待つてやります。甚内はきつとわたしの首に、声のない 哄笑を感じずるでしょう。「どうだ、弥三郎の恩返しは？」——その哄笑はこう云うのです。「お前はもう甚内では無い。阿媽港甚内はこの首なのだ、あの天下に噂の高い、日本第一の大盗人は！」（笑う）ああ、わたしは愉快です。このくらい愉快に思つた事は、一生にただ一度です。が、もし父の弥三右衛門に、わたしの曝し首を見られた時には、——（苦しそうに）勘忍して下さい。お父さん！ 吐血の病に罹つたわたしは、たとひ首を打たれずとも、三年とは命は続かないのです。どうか不孝

は勘忍して下さい、わたしは極道ごくどうに生まれましたが、とにかく
一家の恩だけは返す事が出来たのですから、……

(大正十一年三月)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集4」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年1月27日第1刷発行

1993（平成5）年12月25日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j.utiyama

校正：かとうかおり

1998年12月19日公開

2004年3月10日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

報恩記

芥川龍之介

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>